

はじめに

本誌『コンタクト・ゾーン』は、人文科学ならびに社会科学で注目されている^{コンタクト・ゾーン}接触領域についての研究を公表し、議論を活性化する場を提供するために企画された不定期刊行物として、2008年に公刊された。当時、本誌は京都大学人文科学研究所・人文学国際研究センターの基幹プロジェクトである「複数文化接触領域の人文学」（代表：田中雅一）研究成果を報告する媒体であった。プロジェクトは修了し、その成果は『コンタクト・ゾーンの人文学』（全4巻・晃洋書房）として2012年から翌13年にかけて出版されている。

本誌は、6号から出版拠点を人文科学研究所から大学院人間・環境学研究科（文化人類学分野）に移して査読体制を導入し、より多くの読者に読まれることを期待してオンラインによる公刊をおこなっている。

コンタクト・ゾーンは、アメリカの文学研究家のマリー・ルイズ・プラットが『帝国のまなざし』（1992年公刊）で使用したのものとして知られている。彼女はヨーロッパを中心とする植民地宗主国（厳密には都市部であるメトロポリタン）と非ヨーロッパ諸国（およびヨーロッパの非都市部）との非対称的な、しかし一方的ではない、「接触」を主たるコンタクト・ゾーンとして想定している。ただし、本誌所収の諸論文から明らかなように、本誌では彼女の問題意識を継承しつつも、対象の拡大や^{エリア}地域概念批判など、さらなる展開を目指していることをことわっておきたい。

本号は、2016年10月29日に立命館大学 大阪梅田キャンパスで開催された「戦争・難民・記憶をめぐるポリティクス」（代表：伊地知紀子）プロジェクトの第1回研究会での発表に基づく特集「「壁」はどこにあるのか？」所収の3論文、同年1月10日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で実施されたフィールドネット・ラウンジ企画によるワークショップ「装い／社会／身体——フィールドワーカーによる通文化比較研究」（代表：宮脇千絵、アドバイザー：風戸真理）に基づく特集「装いの人類学に向けて」所収の4論文、同年7月16日に京都大学人文科学研究所において開催された京都人類学研究会7月季節例会シンポジウム「Teaching Anthropology の挑戦——調査と教育と社会の結節点を考える」に基づく同名特集所収の3論文、また投稿論文を5本と研究ノート1本を掲載している。査読で不採用あるいは辞退になったものが7本（研究ノート1本を含む）であった。対象も専門も異なるが、コンタクト・ゾーンという観点から研究対象に迫るという点で共通している。特集数が多かったこともあり、今号はきわめて大部になっている。論文だけでなく、コンタクト・ゾーンに関わる書物を対象とする書評9本を併せて読んでいただければ幸いである。

編集にあたっては、石川泰子氏、木戸麻実氏、朝日美佳氏にお世話になった。

田中雅一（編集代表）

2017年12月